

# 日本の居住空間における経済的価値と心理的価値に関する研究

中庄 涼斗

指導教員 上村浩

## 研究背景

畳は日本の住文化を象徴する伝統的床材であり、長い歴史の中で日本人の生活に深く根付いてきた。しかし近年、住宅の洋風化やライフスタイルの変化、住宅設計上の制約などを背景として、畳の需要は減少傾向にある。一方で、和室や畳に対する心理的・情緒的価値は依然として高いことが指摘されており、経済的価値の低下と心理的価値との乖離が生じている可能性がある。こうした状況を踏まえ、畳の選択行動に影響を与える要因を生活環境や心理的嗜好性の観点から明らかにする必要がある。

## 研究目的

本研究の目的は、生活環境および心理的嗜好性が居住空間における床材選択、とりわけ畳の選択にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることである。住宅の部屋数、回答者の属性、ライフスタイルおよび価値観との関係を分析し、畳選択の特徴とその背景要因について検討する。

## 研究方法

調査方法としてアンケート調査を実施し、主に社会人を対象に回答を得た。調査内容は、①基本属性（性別・年齢・年収・家族構成）、②住環境、③趣味・休日の過ごし方、④仮想住宅における部屋数別の床材選択、⑤四択写真による心理的嗜好性の把握で構成した。得られたデータについて、相関分析および t 検定を用いて、畳選択と各要因との関係を検証した。

## 分析結果

分析の結果、住宅が 1 部屋の場合には全回答者がフローリングを選択したが、2 部屋になると約 4 割の回答者が畳を選択した。一方、3 部屋に増加しても畳選択者は増加せず、2 部屋時点での選好が維持される傾向が確認された。また、30 代との間に統計的に有意な関係が認められ、家族構成が 4 人の家庭や男性において畳選択の割合が高かった。年収との間には明確な関連は見られなかった。さらに、写真選択では畳非選択者の方が「田舎の風景」を好む傾向が示された。

## 考察・結論

以上の結果から、畳の選択は住宅規模の拡大によって自動的に促進されるものではなく、個人の価値観や生活スタイル、心理的嗜好性に強く依存していることが示唆された。特に子育て世代や家族人数の多い家庭において、畳は安全性や多目的性といった機能的・心理的価値を有していると考えられる。一方で、畳に対する情緒的な憧れと実際の居住選択との間には乖離が存在する可能性も示された。今後、畳を次世代へ継承していくためには、経済的価値のみならず心理的・文化的価値を踏まえ、現代の生活様式に適応した畳空間の提案が重要である。